

読解法の基本I 設問文の確認

※ネット講座と合わせて学習しよう。

今回の目標——設問文を深く確認し、思考の方針を明確にする

現代文の問題を解くためには二つの軸が存在します。その一つは本文をしっかり読んで、筆者の述べようとしていることを把握すること、そしてもう一つは設問要求を深く受け止め、出題者の求めていることに的確に^{こた}応えることです。いずれも現代文読解については極めて重要なものですが、ここでは、このうち後者に主眼を置いて現代文の解法と具体的に向き合っていこうと思います。

そもそも現代文の解法については様々な着眼点があります。しかし忘れてはならないのは、その出発点が常に設問文にあるということです。これは一見当たり前のように思えますが、しかし選択肢がある場合は特に、設問要求を軽んじて曖昧^{あやま}なまま選択肢の検討に向かうということは少なくありません。当然、設問要求を軽んじて考え、解答を探しても、思考が迷走するだけです。まずは自分が何について、どのように、答えなければならぬかについてしっかりと自覚する必要があります。

この点について具体的に考えてみましょう。例えば「傍線部Aを説明しなさい」という要求と「傍線部Aについて筆者はどのように考えていますか」という要求では、解答を導く思考の道筋は大きく異なります。すなわち前者は主に傍線部Aの言い換え説明を探す意図をもって本文を探索し、後者は傍線部Aに対する本文に現れた筆者の評価を追跡しなければなりません。この二つの何気ない設問文の表現の違いからでも、どのように本文を探索するかという方針がまったく異なっていることが分かります。

ポイントは、解答を導くために、どのような思考の道筋をたどるのか、それを明確にしつつ問題と向き合うということです。解答を出すためにどのようなアイデア、着眼点があるのか、しっかりと確認してください。

ではまず、設問文の要求の違いをしっかりと意識して、次の問題を解いてみましょう。

〔例題〕 次の文章を読んだ、後の問いに答えよ。

俳句というものの成立の基礎条件になるものが日本人固有の自然観の特異性であるとする、俳句の精神というのも畢竟はこの特異な自然観の詩的表現以外の何物でもあり得ないかと思われて来る。

「春雨」「秋風」は日本人には直ちにまた人生の一断面であって、それはまた一方で不易であると同時に、また一方では流行の諸相でもある。「実」であると同時に「虚」である。「春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏」を例にとつてみよう。これは表面上は純粹な客観的事象の記述に過ぎない。しかし少なくとも俳句を解する日本人にとつては、この句は非常に肉感的である。われわれの心の皮膚はかなり鋭い冷湿の触感を感じ、われわれの心の鼻はかびや煤の臭気にむせる。そのような「カンノウ」の刺激を通じて、われわれ祖先以来のあらゆるわびしくさびしい生活の民族的記憶がよびさまされて来る。同時にまた一般的な「春雨」のどこかはなやかに明るくまたなまめかしい雰囲気と対照されてこの雨漏りのわびしさがいっそう強調される。一方ではまたこの「蜂の巣」の雨にぬれそぼちた姿がはっきりした注意の焦点をなして全句の感じを強調している。A この句を詠んだ芭蕉は人間であると同時に、またこの蜂の巣の主の蜂でもあったのである。

このように自然と人間との「コウシヨウ」を通じて自然を自己の内部に投射し、また自己を自然の表面に映写して、そうしてさらにちがった一段高い自己の目でその関係を静観するのである。

こういうことができるというのが日本人なのである。

こういふふうな立場から見れば「花鳥諷詠」とか「実相観入」とか「写生」とか「真実」とかいうようないろいろなモットーも皆一つのことのいろいろな面を言い表す言葉のように思われて来るのである。

短歌もやはり日本人の短詩である以上その中には俳句におけるごと自然と人間の有機的結合から生じた象徴的な諷詠の要素を多分に含んだものはなはだ多いのであるが、しかし俳句と比較すると、短歌のほうにはどうしても象徴的であるよりもより多く直接的な主観的情緒の表現が鮮明に「ノウコウ」に露出しているものが多いことは否定し難い事実である。そうした短歌の中の主観の主はすなわち作者自身であって、作者はその作の中にその全人格を没入した観があるのが普通である、しかし俳句が短歌とちがうと思われる点は、上にも述べたように花鳥風月と合体した作者自身をもう一段高い地位に立った第二の自分が客観し認識しているようなところがある。「山路来て何やらゆかしすみれ草」でも、すみれと人とが互いにゆかしがっているのを傍らからもう一人の自分が静かにながめ

〈キーワード〉

※ネット講座で説明します。

俳句

自然観 畢竟

不易

流行

客観

花鳥諷詠 実相観入

写生

短歌 短詩 俳句

有機 象徴 諷詠

山路来て何やらゆかし
すみれ草

ているような趣が自分には感ぜられる。

短歌と俳句との精神というかあるいは態度というか、とにかくその内容に対する作者と自己の關係の両者における相違を求めてみると、その相違が主として上記の点に係わっているように思われる。このような差別の起った一つの原因は、俳句の詩形が極度に短くなったために、もし直接的な主観を盛ろうとすると、そのために象徴的な景物の入れ場がなくなってしまうので、そのほうを割愛して象徴的なものに席を^(工)ユズるようになり、従って作者の人間は象徴の中に押し込まれ自然と有機的に結合した姿で表現されるよりほかにしかたがなくなる。その結果として諷詠者としての作者は、むしろ読者と同水準に立つて、その象徴の中に含まれた作者自身を高所からながめるような形になる。

上述のごとき俳句における作者の自己の特殊な立場は必然の結果として俳句に内省的自己批評的あるいは哲学的なおいを付加する。「風流」といい「さび」というのも畢竟は自己を反省し批評することによってのみ獲得し得られる。「心の自由」があつて、はじめて達し得られる境地であらうと思われ。

風流とかさびとかいう言葉が通例消極的な通世的な意味^{とんせいてき}にのみ解釈され、使用されて来た。これには歴史的にそうなるべき理由があつた。すなわち仏教伝来以後今日まで日本国民の間に浸潤した無常観が自然の勢いで俳句の中にも浸透したからである。しかし自分の見るところでは、^Bこれは偶然のことであつて決して俳句の精神と本質的に連関しているものとは思われない。仏教的な無常観から解放された現代人にとっては、積極的な「風流」、能動的な「さび」はいくらでも可能であると思われる。日常劇務に忙殺される社会人が、週末の休暇にすべてを忘却して高山に登る心の自由は風流である。営利に急なる財界の闘士が、早朝忘我の一時間を菊の手入れに費やすは一種の「さび」でないとは言われない。日常生活の拘束からわれわれの心を自由の境地に解放して、その間にともすれば望ましき内省の余裕を享樂するのが風流であり、飽くところを知らぬ欲望を節制して足るを知り分に安んずることを教える自己批判がさびの真髓ではあるまいか。

C 俳句を修業するということは、以上の見地から考えると、退嬰的な無常観への逃避でもなければ、消極的なあきらめの哲学の演習でもなく、またひとりよがりのお座敷芸でもない。それどころか、ややもすればわれわれの中のさもしい小我のために失われんとする心の自由を見失わないように監視を怠らなわれわれの心の目の鋭さを訓練するという効果をもつことも不可能ではない。

(寺田寅彦「俳句の精神」による)

主観

内省 批評

遁世 無常

忘我

享樂

退嬰的

- (注) 1 「花鳥諷詠」——高浜虚子(一八七四～一九五九)が提唱した俳句の理念。
 2 「実相観入」——斎藤茂吉(一八八二～一九五三)が提唱した短歌の理念。
 3 「写生」——正岡子規(一八六七～一九〇二)が俳句や短歌などで提唱した文学理念。

問一 傍線部(ア)～(エ)のカタカナを漢字に直せ。

- | | | | | | |
|-----|------|-----|-----|-------|-----|
| (ア) | カンノウ | () | (イ) | コウシヨウ | () |
| (ウ) | ノウコウ | () | (エ) | ユズル | () |

問二 傍線部A「この句を詠んだ芭蕉は人間であると同時に、またこの蜂の巣の主の蜂でもあったのである」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 芭蕉が、蜂の巣の主の蜂になりきり、蜂の感覚に即して鋭い冷湿の触感とかびや煤の臭気とを句に詠んだこと。
- ② 芭蕉が、蜂の心を思いやりながらも、わびしくさびしい生活の中で生きる人間として自己を句に詠んだこと。
- ③ 芭蕉が、蜂の巣の主の蜂に注意の焦点を合わせながら、あくまで人間の立場に立つて蜂の巣を句に詠んだこと。
- ④ 芭蕉が、蜂の巣を見つめ、蜂に自らの姿を重ね合わせた上で、さらに一段高い自己の視点から句を詠んだこと。
- ⑤ 芭蕉が、対象としての蜂に自己の姿を見いだしながらも、人間である自己の方を客観的事象として句に詠んだこと。

問三 傍線部B「これは偶然のことであって決して俳句の精神と本質的に連関しているものとは思われない」とあるが、なぜそのように言えるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 日常的な束縛にとらわれず心を自由の境地に解放したり、あるがままの自己を肯定して行動したりすることこそが「風流」であり、「さび」であるから。

【重要】「到達確認テスト」の前に、必ず読み直しておこう。

- ② 日常生活の拘束の中にあつて伝統的な忘我の境地に心を解き放つたり、世の無常を觀照したりすることこそが「風流」であり、「さび」であるから。
- ③ 日々の仕事に追われる生活から逃れたり、足るを知り分に安んずる仏教的な境地に至つたりすることこそが「風流」であり、「さび」であるから。
- ④ 心を自由にして自己をふりかえる余裕を楽しんだり、欲望を節制する自己批判の視点を持つことこそが「風流」であり、「さび」であるから。
- ⑤ 社会人としての自己の生活を反省したり、日常生活から解放されたところで趣味の世界に遊んだりすることこそが「風流」であり、「さび」であるから。

問四 傍線部の「俳句を修業する」ということについて、筆者はどのように考えているか。筆者の考えと異なるものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。

- ① 俳句の修業の基本は、日本人固有の仏教的な無常觀を理解することである。それを通して、内省的で哲学的な俳句を作ることができるようになる。
- ② 俳句の修業では、まず自然を觀察する力を磨くことが必要である。それによって、今まで気づかずになっていた自然界の美しさを発見し、自覚できるようになる。
- ③ 俳句の修業は、外界にとらわれずひたすら自己の内面を凝視し内省することである。その結果、自然と自己とを一体化した姿で象徴的に表現できるようになる。
- ④ 俳句の修業は、日常生活の拘束から逃れて自然を楽しむ遁世的な境地をめざすことではない。むしろ、積極的に自己の心の目の鋭さをきたえることである。
- ⑤ 俳句の修業では、觀察眼を養うだけでなく自己と外界との有機的な関係を内省する必要がある。それによる批判力と認識力の獲得に精神的意義が見いだされる。
- ⑥ 俳句の修業では、景物の中から焦点となるものを取捨選択し不用なものを切り捨てる訓練を積む。その成果が、むだの少ない文章となつてあらわれる。

現代文の解答導出は、設問文を精密に読んでみるところから始まります。何をどのように答えるのか決して曖昧にせず、しっかりと設問要求の方針に従って考えていくことが重要です。

着眼点① 設問文の要求に合わせて解答を探す。

設問要求のパターン（※ネット講座で説明します）

① 言い換え、説明を求める設問



② 理由を求める設問



③ 特定の条件を出題者が課してくる設問



現代文問題の主流である、傍線説明の問題は大きく分けて以上の三つの視点に分かれます。問題を解くうえで、まずこの三つの視点のうちいずれになるのか、明確にして考えていくことが大切です。